岩手県立博物館だより

Newsletter of the Iwate Prefectural Museum
岩手県立博物館ホームページアドレス
http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/

2020. 3 No. 164

目次／テーマ展　化石の水族館 **表紙**／いわて文化ノート　今に伝わる古代の塩づくり**p.2-3** ／展覧会案内　テーマ展「化石の水族館」**p.4-5** ／事業報告　考古学セミナー現地見学会　「近世たたら場―平庭鉄山を歩く―」　事業報告　令和元年度　岩手県文化振興事業団プレゼンツ「文化・芸術が集うときin一関」**p.6** ／活動レポート　文化の日開催イベント　活動レポート　トピック展「もしかしてヒアリ!?」**p.7** ／インフォメーション**p.8**

テーマ展

化石の水族館

2020年3月14日(土)～5月6日(水)

地質時代の水族館(イメージ写真)

博物館に展示されている化石は今は石になっていますが、大昔に生きていた当時にはさまざまな生活をしていました。今回のテーマ展では、この写真のように化石となった生物がどのように生きていたのかを展示いたします。

■いわて文化ノート

今に伝わる古代の塩づくり

学芸第三課長　濱田　宏(考古部門)

はじめに

1997年、我が国は塩の専売制を廃止します。それ以降、縄文時代以来の伝統である海水を利用した日本の塩づくりには、個人や事業主も生業として携わり、出来上がった塩は売ることも可能になりました。現在、北陸や東北地方の沿岸部などでは、海沿いの道に民間の製塩工場が建ち並ぶところもあり、それぞれの地域の特産品として、独自の商品が数多く開発・販売されています。

自らの研究対象として製塩に目を向けるようになってからは、宮城県塩釜市にある鹽竈神社の末社、御釜神社で行われている「藻塩焼神事」に参列するなど、塩にまつわる民俗や文化などにも興味が湧いてきました。

■岩塩がない日本の製塩事情

米国や欧州各国、中東、アフリカなどのように、国内に岩塩が存在しない日本では、海水を煮詰めることで塩を作り出してきました。縄文時代の遺跡から「製塩土器」が出土していることがその証拠のひとつです。底が小さい、もしくは尖っている、土器自体が薄いなどの特徴がありますが、本県では久慈市大芦Ⅰ遺跡から出土した甕形の土器が有名です。

久慈市大芦Ⅰ遺跡出土製塩土器

大芦Ⅰ遺跡調査報告書より

当時、岩手の沿岸地域ではこのような土器を用いて塩を作り、人体に必要不可欠な塩分を摂取していました。

時は進み、平安時代になっても製塩土器は使われますが、この他にも塩づくりが行われていた証拠となる出土品があります。土器の底の部分にカマドの炎がうまくあたるように設置された「土製支脚」という遺物がそれです。

この時代になると、ただただ海水を煮て結晶化を待つのではなく、製塩の効率化を図るための仕掛けや工夫がなされます。また、塩づくりが盛んに行われるようになって、燃料となる薪が不足したであろうことは想像に難くありませんが、資源の有効活用への対処も必要だったと考えられます。

■岩手の製塩に関連する遺跡

2011年の東日本大震災以降、三陸沿岸道路の建設は急ピッチで進められました。その際、事前の遺跡発掘調査が各沿岸市町村で行われましたが、そのひとつに洋野町「上のマッカ」という一風変わった名前の遺跡があります。

調査では、岩手県で初めて製塩土器を伴う工房跡が見つかりました。右上の写真のように、製塩土器は破片ばかりですが、接合するものもあります。工房の床面には2か所に火を焚いた跡が残り、製塩炉と考えられます。土器の特徴から、

洋野町上のマッカ遺跡の製塩工房跡

上のマッカ遺跡調査報告書より

上のマッカ遺跡出土平安時代の製塩土器

上のマッカ遺跡調査報告書より

年代は平安時代とされていますが、洋野町には「二十一平遺跡」という同じ時期の製塩遺跡も存在します。数は少ないですが、本県の製塩関連遺跡は、洋野町を主体として宮古市以北に見られます。

■宮城県無形文化財「藻塩焼神事」

これまで海水を利用するという方法に変化がなかった日本の塩づくりですが、時代によって数々の技術改良がありました。ここでは、平安時代の塩生産の効率化をうかがうことができる「藻塩焼神事」についてご紹介します。

冒頭でも述べたこの神事は、毎年7月6日から8日にかけて執り行われ、6日は「藻刈神事」、7日「水替神事」、8日の「藻塩焼神事」からなります。

藻刈は、海上に船を出し海藻であるホンダワラ類を刈り取って唐櫃に納め、御釜神社まで運ぶ工程。水替神事は、それまで神釜に入っていた水と新しく海から汲んだ満潮時の潮水を入れ替える儀式で

塩釜市御釜神社藻塩焼神事当日の様子

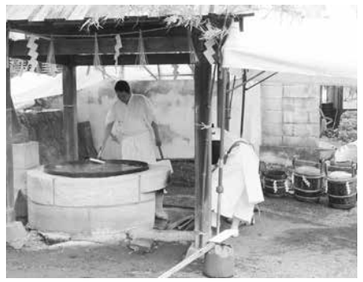
す。最終日の藻塩焼神事は、一昨年参列した際に撮影した写真を見ながら解説します。

■煎熬（せんごう）とは

誤って味わうことになってしまうと、かなり塩辛く感じる海の水ですが、中に含まれる塩分は3%程度です。その海水に手を加えて塩分濃度を上げ（「採かん」という）、それを煮詰めて塩をつくりだすことを「煎熬」と言います。濃度を高められた海水は「かん水」と呼ばれ、これを煮詰めると通常よりも早く効率的に塩を得ることができます。

この藻塩焼神事では、刈り取った海藻を使ってかん水を作り、煎熬を行うという一連の作業が再現されます。

かん水を作る作業



灰汁の除去作業

2枚の写真のうち、上はホンダワラという海藻の上から海水を注ぎ、鉄鍋内の海水濃度を高める作業中、下は灰汁を除去している状況です。このあたりからは、単調な作業が続くので、マスコミの取材や人々の笑い声が境内に響きます。

出来たばかりの藻塩

それから1時間後ぐらいだったでしょうか。かき混ぜている釜の中が突然白くなり始め、結晶化した塩が溢れ出しました。さらに煮詰めていると、烏帽子をかぶった神官さんが2人お出ましになり、塩の神様にお供えする出来立ての藻塩を盛りつけ始めました。

■神事を終えて

雅楽の演奏とともに神事はクライマックスを迎えます。張りつめた空気に包まれながら厳かに儀式は進み、塩づくりの神事は3時間ほどで終了しました。参列者は、2列に並んでお神酒と出来立ての藻塩を手に境内をあとにします。

この藻塩焼ですが、御釜神社で再現される方法以外に、天日にさらして予め塩を析出させた海藻を焼いて、できた灰をまた海水に溶かし込むという説もあるようです。いずれ、効率を追求する日本人らしさが、この神事からも窺えました。

お神酒と藻塩をいただく参列者

■古代の製法でつくられる現代の塩

これも一昨年のことですが、日本海側を秋田市から新潟県村上市まで南下し、古代の製法で塩生産を行っている現場を訪ねました。もちろん、その製塩工場の売りは藻塩。先代から製法を引き継いで、藻塩をメインに塩を数種類作っているとのことでした。

原料として枯渇する心配のない日本海の荒波を見ながら工場の奥に進むと、大きな製塩釜が4基並んでいます。その脇には、さほど新鮮さを感じない海藻が入ったザルが置いてありました。

「海藻の上から海水をかければ、下の塩分濃度が上がるのですね」と問いかけ

現代の製塩釜と海藻のホンダワラ

るも「磯枯れって知ってるでしょ」とすかさず社長さん。最近、内湾では海藻が育たず、沖まで船を出さなければならなくなったと、小声で嘆いておられました。

出来上がった藻塩は薄く紫がかり、旨そう！と思いましたが、「白くないと売れないんだよ」。店頭では、大粒で真っ白な塩も併売されていました。

おわりに

日本の伝統である海水を利用した製塩は、効率化を目指して多くの改良を重ねてきました。今後、県内でもその技術や製法の解明に繋がる新たな発見があることを期待しつつ、製塩に対する新鮮な切り口を探そうと思います。

■展覧会案内

テーマ展　「化石の水族館」

会期：令和2年3月14日(土)～5月6日(水)　会場：特別展示室

現在の海の中には魚やクジラ、イカやタコにエビ、貝などさまざまな生物が生きています。しかし、こうした生物たちはずっと昔から海の中に住んでいたわけではありません。地球上に最初の生命が出現したのは約 38 億年前と考えられていますが、それから現在までの間、多くの生物が現れては消えていき、長い時間をかけて現在の生物相へと変わってきました。私たちはかつて地球上にどのような生物が生きていたのかということを化石をとおして知ることができます。

大昔に絶滅し、現在では化石となった生物たちも生きていた当時にはそれぞれの生活がありました。今回のテーマ展では、こうした大昔の生物たちがどのように生きていたのかということに焦点を当てて展示をしたいと考えています。

最初の展示では今から約 5 億 7000 万年前、「エディアカラ紀」と呼ばれる時代の生物たちを紹介します。エディアカラ紀には、現在地球上に生きている生物との類縁関係がよくわからない奇妙な生物が住んでいました。この時代の生物にはディッキンソニア（図 1）などがいます。こうした生物たちの多くは、当時の海底表面を広く覆っていた微生物が密集して形成されるマット（微生物マット）の上やその中で生活をしていたと考えられており、マットの下の地面深くにまで潜って生活をするような生物はほとんどいなかったと考えられています。

図 1. ディッキンソニア（複製）

こうした生活が劇的に変化したのが、続く時代の古生代カンブリア紀（約 5 億 4100 万～ 4 億 8500 万年前）です。カンブリア紀は「カンブリア爆発」と称されるほど、爆発的な生物の多様化が生じた時代です。化石として有名な三葉虫や、アノマロカリスやオパビニアといった奇妙な生物たちが出現したのもこの時代です。また、カンブリア紀には、多くの生物が地面の中深くにまで潜るようになりました。すると表面の微生物マットは破壊され、酸素を含む海水と地面を構成する堆積物と混じり、生物によってよくかき回された（生物擾乱（じょうらん）と言います）現在の海のような柔らかい海底面へと変化していきました。またそれによって、より多くの生物が生きていける地下生活空間が拡がりました。こうしたカンブリア紀の劇的な生物擾乱（じょうらん）とそれによる堆積物の変化、生物量の増加を「カンブリア紀の農耕革命」と言います。

次の展示では、主にカンブリア紀以降の古生代（オルドビス紀～ペルム紀）において、どのように水の中の生物相が変わっていったのかを紹介します。

オルドビス紀（約 4 億 8500 万～ 4 億 4400 万年前）の海では「オルドビス紀の生物大多様化事件」と呼ばれるほど多様な生物が出現しました。この時代は古生代をとおして最大とも言われるほど三葉虫が多様化しました。また、腕足動物という一見すると二枚貝によく似た姿をした動物も繁栄しました。ほかにも、現在の海にもその生き残りがいるオウムガイが出現した時代としても知られています。さらに、この時代にはまだ顎を持たない原始的な魚類（無顎類（むがくるい））も繁栄したと言われています。

図 2. シルル紀の床板サンゴ

続くシルル紀（約 4 億 4400 万～ 4 億 1900 万年前）になると、暖かい海でサンゴ礁が広がりました。この時代に生きていたサンゴは床板サンゴ（図 2）や四放サンゴと言って、現在私たちが海で目にするサンゴと違った種類のものでした。こうしたシルル紀のサンゴ化石は岩手県大船渡市や住田町でも見つかっています。また、シルル紀の終わり頃には原始的な顎を持つ魚類も出現しました。

次のデボン紀（約 4 億 1900 万～ 3 億 5900 万年前）は「魚の時代」と言われるほど魚類が繁栄した時代です。この時代の魚類はいわゆる「甲冑魚（かっちゅうぎょ）」と呼ばれる、頭や胴体が硬い骨質の板で覆われたようなものが主でした。特に繁栄した「甲冑魚（かっちゅうぎょ）」の中には板皮類（ばんぴるい）のボスリオレピス（図 3）が含まれます。板皮類（ばんぴるい）はデボン紀の世界中いたるところに分布していたと考えられ、実際に大船渡市のデボン紀の地層からも板皮類（ばんぴるい）の体の一部の化石が見つかっています。また、デボン紀はアンモナイトが地球上に初めて現れた時代でもあり、この時代のアンモナイトの化石は日本では今のところ一関市東山町でのみ見つかっています。

図 3. ボスリオレピス（複製）

デボン紀に繁栄した「甲冑魚（かっちゅうぎょ）」たちは次の石炭紀（約 3 億 5900 万～ 3 億年前）にはほとんど絶滅してしまいます。石炭紀や古生代最後の時代であるペルム紀（約 3 億～ 2 億 5200 万年）の海で繁栄した魚類に、サメの仲間がいます。特にペルム紀の海にはオルサカンサスという大型のサメも生きていました。また、陸前高田市に見られるペルム紀の地層からは多数の腕足動物の化石が見つかっており、当時の海の中が生命豊かな環境であったことが伺えます。また、石炭紀～ペルム紀においては、川や湖などの陸地の水の中にも両生類や水生は虫類などの多くの生物が住んでいました。

しかし、こうした古生代の生物たちはペルム紀の終わりに生じた大規模な大量絶滅（P/T 境界の大量絶滅）によってほとんどのものが姿を消してしまいました。

次の展示では古生代の後の時代、中生代や新生代の海でどのような生物が出現し、繁栄したのかを紹介します。

中生代は、三畳紀（約 2 億 5200 万～ 2 億年前）・ジュラ紀（約 2 億～ 1 億 4500 万年前）・白亜紀（約 1 億 4500 万～ 6600 万年前）の 3 つの時代に分けられます。これらの時代をとおして繁栄した海の生物にアンモナイトがいます。また、中生代は「は虫類の時代」と称されるほど陸上でも水中でもは虫類が繁栄した時代です。岩手県の沿岸部に分布する白亜紀の地層（宮古層群や久慈層群）からも多数のアンモナイトや、モササウルスなどの海生は虫類の歯や骨の化石が見つかっています。本展示では、岩手県で見つかったアンモナイトを中心に中生代の海の中で生物たちがどのように暮らしていたかを紹介します。

中生代の次の時代を新生代と言います。新生代は古第三紀（約 6600 ～ 2300 万年前）・新第三紀（約 2300 ～ 258 万年前）・第四紀（258 万年前～現在）の 3 つに分けられており、海では貝の仲間やほ乳類が繁栄する時代でもあります。地質時代の新生代の海にも多くの生物が生きていましたが、今回は特に深海魚に注目して展示をしたいと思います。

岩手県雫石町の坂本川流域の新第三紀中新世の地層からは、深海魚の化石（図 4）が多数発見されています。これらの化石は、岩手県の魚類化石の研究者佐藤二郎氏によって新種として報告されました。なぜ雫石町から深海魚の化石が見つかるのでしょうか？ じつは大昔の雫石町は深い海の中であり、長い時間をかけて浅い海、そして現在の陸地へと変化してきたからなのです。

最後の展示では、化石となった生物の生活を知る方法に焦点を当てて展示を行います。

古生物の生活の様子を復元する方法はいくつかありますが、その一つとして生痕（せいこん）化石（図 5）から推定するという方法があります。生痕（せいこん）化石は「生物の行動の化石」とも呼ばれ、生物が歩いた跡や巣穴の跡、隠れた跡から糞や卵の化石まで生活のさまざまな痕跡が化石となったものです。そのため、生痕（せいこん）化石を調べることでその場所で生物がどのように暮らしていたかを想像することができます。

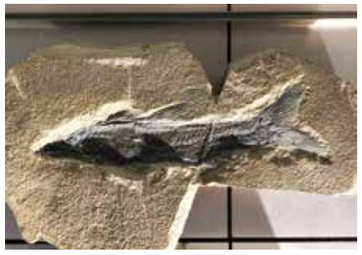


図 4. 深海魚ナナエカガミイワシ（複製）

図 5. 生痕（せいこん）化石（巣穴の化石）

例えば、狭い範囲に巣穴の化石が密集して出てきた場合には、そこでかつて多くの生物がまるでマンションのように集まって生きていたことが伺えます。また例えば、二枚貝化石の殻の表面をよく見ると、小さな丸い穴が空いていることがあります。これは捕食痕と言い、別の生物がこの貝を襲って食べた跡が残ったものです。つまりこの痕跡によってこの貝が生きていた時には天敵がいたことが予想されるわけです。このように、さまざまな証拠から地質時代の生物の生活の様子を復元する学問のことを「古生態学」と言います。

今回の展示をとおして、私たちが地球上に現れるよりももっと古い時代、誰も見たことがない古生物たちの生活の様子を想像する機会を提供できればと考えております。なお、本展示は一般財団法人全国科学博物館振興財団の全国科学博物館活動等助成事業の助成を受けて実施されました。

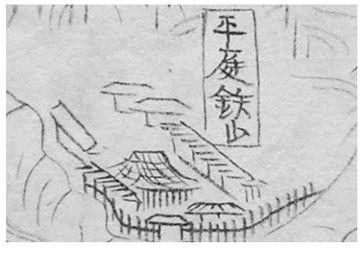
（学芸員　望月貴史）

■事業報告

考古学セミナー現地見学会　「近世たたら場―平庭鉄山を歩く―」

開催日：令和元年10月26日(土)

毎年、講演会と現地見学会の２本立てで行う考古学セミナーですが、今年は夏に考古部門で開催したテーマ展「古・岩手のクロガネ」の関連事業として企画しました。現地見学会は、調査事例が少ないため、展覧会ではあまり紹介できなかった近世たたら場について、現況として往事の排滓場などの原風景が良好に残る平庭鉄山跡の踏査を計画しました。



三閉伊日記から抜粋

平庭鉄山跡は、平庭高原の葛巻ワイン工場から南側に見下ろせる元町川左岸の山裾に位置しています。当日は葛巻町教育委員会と同文化財保護委員会の御協力により 22 名の参加がありました。

講師に、元岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査課長の佐々木清文氏をお迎えし、葛巻町水車の里交流館において、第一部が講座「八戸藩葛巻商人の鉄山経営」、第二部として平庭鉄山跡を見学する予定でした。現地は雑木林で見通しが悪いため、落葉する晩秋に企画しましたが、今年の 10 月は台風や雨の日が多く、この日も前日から続く雨で元町川が増水して遺跡に移動できず、講座終了後の現地見学は中止となりました。現地での解説を楽しみにしていた参加者からは残念との声が多くありました。

（学芸第一課長　小山内透）

講師・葛巻町関係者との事前調査風景

排滓場斜面

■事業報告

令和元年度 岩手県文化振興事業団プレゼンツ「文化・芸術が集うとき in 一関」

会期：令和元年11月29日(金)～12月１日(日)

本事業は、県民の皆様方に岩手の優れた自然や文化、歴史、そして文化財保護について理解を深めていただくとともに、音楽や美術についても親しんでいただくことを目的として、当事業団を構成する県民会館、埋蔵文化財センター、博物館および美術館の４施設が一体となって行うものです。毎年県内各地で開催しており、本年度の会場は一関文化センターでした。

博物館は、展示室で埋蔵文化財センターとの合同展を開催しました。当館は一関市にゆかりのある資料を中心に約 70 点を展示し、３日間で 573 名の方々にご来場いただきました。

「一関市に住んでいるのに、知らない一関がある」と皆様熱心にご覧になっていました。注目を集めた資料には、旧東山町で出土した日本最古のアンモナイト化石、岩手県最古の土偶、須川温泉近くで採集されたイヌワシの若鳥の標本などがあります。イヌワシは、火山性有毒ガスによって倒れたと推測され、大きなキツネの背中にガッシリと爪を食い込ませたまま死んでいたそうです。

最終日の学芸員による展示解説会では、特別に動物標本にさわっていただく時間を設け、お子様を中心に好評でした。

展示品に関するクイズも行われ、全問正解の方には粗品を差し上げました。缶バッジづくりのコーナーもあり、「自分で好きな絵を描いて、世界に一つだけのオリジナルバッジを作ろう」と呼びかけましたが、こちらでご用意したデザインもなかなかのクオリティと好評でした。

このほか、30 日（土）には小ホールで「アート・シネマ上映会」（「藤城清治銀河鉄道の夜」ほか）、１日（日）には中ホールで「いわて JAZZ2019 エキサイティング・ビッグバンド in 一関」が開催され、「合同展」と合わせて 1,015 名の方にご来場いただきました。

（主任専門学芸員　金子昭彦）

■活動レポート

文化の日開催イベント

開催日：令和元年11月３日(日)

当館では、毎年 11 月３日の文化の日を入館無料とし、博物館活動の啓蒙普及を目的として各種イベントを開催しています。今年度は企画展「よろい・かぶと･かたなの世界」の開催期間にあたり、1,000 名を超える入館者が訪れ、各イベントを楽しんでいただきました。

大人向けイベントとしては、佐野美術館名誉館長 渡邉妙子氏による刀剣の講演が行われました。会場には多くの参加者が詰め掛け、関心の高さが窺われました。講演会参加者にとっては企画展示資料の理解を深める良い機会となったようです。

子ども向けイベントとしては、体験学習室で「昔あそびたいけん」と、各展示室に設置されたスタンプを集めて廻る「スタンプラリー」を開催しました。

昔あそびたいけんは、毎年博物館まつりで実施されるイベントです。イタドリ笛の付いた風船を膨らませて「ブッブ～」という大きな音を出し、紙風船を膨らませて手のひらで弾ませ、折り紙で鶴を作り、塗り絵を楽しみ、割りばし鉄砲で輪ゴムを飛ばして遊ぶ。大人にとっては昭和の懐かしい遊びでも、令和の子どもたちには新鮮だったことでしょう。その喜ぶ姿に保護者の方々はもちろんのこと、運営を手伝ってくださった博物館友の会ボランティアの皆様も大いに励まされたご様子でした。

昔あそびたいけんの様子

一方、スタンプラリーは小学生以下対象の事業で、エントランスホールの受付でスタンプシートを貰い、展示室を廻ってスタンプを集め、ゴールの景品コーナーで、「天然石の小瓶詰め放題」を体験いただくという内容です。小瓶詰め放題は大変盛況で、好みの天然石を集めたビンを見て子どもたちは満足そうでした。

当館では今後もお客様に楽しんでいただけるイベントを随時開催したいと考えています。どうぞご期待ください。

（専門学芸員　米田　寛）

■活動レポート

トピック展　「もしかしてヒアリ!?」

会期：令和元年12月10日(火)～令和2年2月2日(日)

外来種のヒアリは攻撃性が強く、毒を持つことから、2017 年の初発見以来、国内への定着が警戒されてきました。そんな中、2019 年には、東京で発見された巣から繁殖可能な女王アリが飛び立った可能性があると報道されました。今後、岩手でも警戒する必要があるのか心配している人もいるかと思い、実物標本を展示するトピック展を開催しました。標本はアメリカ産で、各地の博物館で問い合わせに対応するために、昆虫担当学芸員協議会を通して提供されたものです。

ヒアリは体長 2.5 ～ 6 ㎜と小さく、体の色は赤茶色です。このような見た目のアリは岩手にもたくさん生息しています。展示では、在来種のシワクシケアリと並べて展示しましたが、肉眼で見分けることは大変困難です。

今回の展示は、ヒアリと他のアリを見分けることが難しいことを知ってもらうことと、むやみなアリ駆除を防ぐことを目的にしていました。ヒアリは、岩手では越冬できないと考えられており、県内で発見されることはほとんど考えられません。ですから、身近なところで見つけた「ヒアリのようなアリ」は、おそらく在来のアリである可能性が高いのです。これを「疑わしきは駆除する」とばかりに、むやみに殺虫剤を使うことは、地域の生態系に悪影響があるだけでなく、生物の空白地帯を作り出し、かえって外来種の侵入しやすい環境を作ってしまいます。展示ではヒアリの生態を紹介し、過度に心配する必要はないことと、「もしかしてヒアリ !?」と思ったときは捕まえて博物館へ、ということをお伝えしました。

実物が見られるとあって展示は好評で、関心の高さを実感しました。この展示を機に、身近にどんなアリがいるのか普段から注目していただければ、不意の外来種の侵入にいち早く気づくことができるのではと考えています。

（専門学芸調査員　渡辺修二）

展示の様子

岩手県立博物館
IWATE PREFECTURAL MUSEUM

インフォメーション〈令和2年3月1日～令和2年6月30日〉

展覧会

●テーマ展　「化石の水族館」

令和２年３月14日(土)～５月６日(水)　会場：２階・特別展示室

岩手県内外のさまざまな時代の化石の展示をとおして、皆さまを「地質時代の水族館」へとご案内します。

◆特別講演会

「恐竜好き少年が魚類化石研究者になりました」
令和2年3月28日(土)※3月22日(日)の日曜講座から日程変更
13：30～15：00　地階・講堂　聴講無料
講師：宮田真也氏(城西大学水田記念博物館学芸員)
「マツコの知らない世界」でもおなじみの城西大学水田記念博物館学芸員の宮田真也氏をお招きし、魚化石の魅力についてたっぷり語っていただきます。

◆展示解説会　特別展示室　要入館料

令和2年3月15日(日)、3月29日(日)、4月12日(日)、5月3日(日・祝)
各回とも14：30～15：30　当館学芸員が見所を解説いたします。

◆県博日曜講座

令和2年4月26日(日)　13：30～15：00　地階・講堂　聴講無料
「生命史をひもとくージュラ紀ー」　講師：望月貴史(当館学芸員)

お知らせ

●ゴールデンウィーク中の休館日

4月27日(月)・5月7日(木)は、休館日となりますのでご注意ください。

国際博物館の日

●入館無料　5月17日(日)

国際博物館の日を記念して5月17日(日)は入館無料となります。
※18日(月)は休館日

●国際博物館の日記念　県博バックヤードツアー(事前申込制)

5月17日(日)　事前申込(応募者多数の場合は抽選)

国際博物館の日(5月18日)にちなみ、普段は見られない収蔵庫などを特別にご案内します。いずれかのコースを選んでお申込みください。(各回定員10名)

①自然コース 10：20～11：40 (所要時間約80分)
②歴史コース 13：20～14：40 (所要時間約80分)

募集期間：4月2日(木)～4月26日(日)必着
応募方法：往復はがきに①参加希望コース、②参加者全員の氏名、電話番号を明記の上、当館「県博バックヤードツアー係」宛てに郵送してください。

県博日曜講座

第２・第４日曜日　13：30～15：00　当日受付　聴講無料

当館学芸員等が岩手の文化や歴史、自然について解説します。

*展覧会関連講座

3月 8日「雑学のススメ」　講師：髙橋廣至(当館館長)
* 3月28日 (土)「恐竜好き少年が魚類化石研究者になりました」　講師：宮田真也氏(城西大学水田記念博物館学芸員)
4月26日「生命史をひもとくージュラ紀ー」講師：望月貴史(当館学芸員)
5月10日「土偶が少ない沿岸地域
ー縄文～弥生時代における岩手県の内陸と沿岸ー」
講師：金子昭彦(当館学芸員)
5月24日「未定」　講師：丸山浩治(当館学芸員)
6月14日「三陸海岸にサンゴ礁があった! 豊かな生物に彩られた1億年前の海」
講師：大路樹生(名古屋大学博物館館長)
6月28日「巻貝形土製品と宮古の遺跡(仮)」
講師：長谷川真(宮古市崎山貝塚縄文の森ミュージアム主査)

週末の催し

◆ミュージアムシアター

毎月第1土曜日 13：30～15：00頃　講堂　当日受付　視聴無料

○3月7日　防災と名作アニメ(アニメ／85分／幼児～小学生向け)
①サル太郎　地震には負けないぞ! 地震への備え大作戦
②三人の騎士
○4月4日　春のアニメスペシャル
①花いっぱいになあれ(アニメ／12分／幼児～小学生向け)
②ピノキオ(アニメ／86分／幼児～小学生向け)
○5月2日　ゴールデンウィークアニメ特集
①ぞくぞく村のオバケたち(アニメ／52分／幼児～小学生向け)
◎ミイラのラムさん　◎魔女のオバタン
②ねぎぼうずのあさたろう(アニメ／50分／幼児～小学生向け)
◎鉄火肌火の玉おてつ　◎はらぺこ侍必殺剣
○6月6日　世界遺産を知る
紅い襷～富岡製糸場物語～(実写／100分／一般向け)

◆チャレンジ! はくぶつかん

毎月第２・第３土曜、日曜、祝日 小学生向け 随時受付

チャレンジ! マークをさがして はくぶつかんをたんけん!

3月 14日・15日・21日・22日	テーマ：石
4月 11日・12日・18日・19日	テーマ：魚
5月 9日・10日・16日・17日	テーマ：植物
6月 13日・14日・20日・21日	テーマ：三陸

◆たいけん教室～みんなでためそう～ (事前申込制)

毎週日曜日　13：00～14：30　幼児(保護者同伴)・小学生20名程度

さまざまな遊びやものづくり、実験を体験してみましょう。
※全プログラム有料(材料費代／プログラムごとに異なります)。
※要事前申込み。開催日の1週間前の日曜日から電話または博物館で開館時間(9：30～16：30、休館日を除く)に先着順に受け付けます。1度に3名まで予約可能です。予約状況・材料費代はホームページでご確認ください。

3月	1日　お絵かきはんこ 8日　アンモナイトの消しゴムづくり 15日　手づくり万華鏡 22日　天然石のフォトフレーム 29日　ウォータードームづくり	5月	3日　アンモナイトの消しゴムづくり 10日　砂絵 17日　まが玉アクセサリー 24日　オリジナル卵をつくろう 31日　草花のそめもの
4月	5日　(おやすみ) 12日　スライムであそぼう 19日　猫絵馬づくり 26日　こいのぼりづくり	6月	7日　チャグチャグ馬コづくり 14日　ばねのキツツキおもちゃ 21日　手づくり万華鏡 28日　化石のレプリカ

ゴールデンウィークイベント

◆ふれあい動物園

令和２年5月2日(土)

毎回大好評!可愛い&珍しい動物たち大集合♪芝生広場で小動物たちとふれあうことができる動物園を開催します。

◆オリジナルこいのぼりをつくろう！

令和２年5月3日(日・祝)

こいのぼりの風船に色を塗ってオリジナルこいのぼりをつくってみよう!

◆ミニSL＆電車でレッツゴー！

令和２年5月4日(月・祝)～5月5日(火・祝)

みんなでミニSLや電車に乗ろう。博物館の芝生広場を蒸気機関車たちが力強く走ります!

定時解説

土曜日・祝日　13：30～14：30

解説員が常設展示室をご案内します。そのほかにも随時、解説員が皆様のご質問や解説のご要望におこたえしています。
※他の館内イベントとの兼ね合いでお休みする場合があります。

利用のご案内

■開館時間　9：30～16：30(入館は16：00まで)
■休 館 日　月曜日(月曜が休日の場合は開館、翌平日休館)
9月1日(火)～9月10日(木)[資料整理日]
12月28日(月)～1月4日(月)[年末年始]
■入 館 料　一般310(140)円・学生140(70)円・高校生以下無料
(　)内は20名以上の団体割引料金
※9月21日(月・敬老の日)は65歳以上の方無料
※11月3日(火・文化の日)は入館無料

※学校教育活動で入館する児童生徒の引率者は、申請により入館料免除となります。
※療育手帳、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方、及びその付き添いの方は無料です。

岩手県立博物館だより 第164号 令和2年3月1日発行	編集　岩手県立博物館 〒020-0102　盛岡市上田字松屋敷34 Tel. (019)661-2831／ Fax. (019)665-1214 発行　公益財団法人岩手県文化振興事業団 〒020-0023　盛岡市内丸13-1 Tel. (019)654-2235／ Fax. (019)625-3595